

労働リーダーシップ東日本コース 40周年記念シンポジウム

金属労協（IMF-JC）は、2007年4月27日、東京・白金台の明治学院大学本館大会議場において、IMF-JC労働リーダーシップ東日本コース40周年記念シンポジウムを、厚生労働省や日本経団連、歴代講師陣、東西労働リーダーシップコースの運営委員などJCリーダーシップを支えていただいた方々、そして構成産別・企連・単組、支部の役員の方々、さらにはこの10年間のリーダーシップコースの受講生など約120名の出席の下、開催した。

記念シンポジウムでは、司会を務めた若松英幸金属労協事務局次長の開会の辞にひきつづき、主催者を代表して、金属労協の加藤議長が挨拶、40年にわたる明治学院大学の協力、運営委員の先生方、厚労省、経営者団体、大学の各歴代講師のご尽力、そして受講生を派遣された各産別・単組・支部の関係各位の尽力に感謝した。来賓挨拶として、明治学院大学の太田武学長、厚労省の金子順一政策統括官、運営長の太田浩二明治学院大学教授、運営委員の神田良明治学院大学教授からそれぞれ祝辞を頂戴した。（祝辞要旨58-59頁に掲載）

この後、基調講演として、本コースの創設者の一人である金井信一郎・明治学院大学元学長から、「労働リーダーシップコース創設の頃に思う」と題して、講演を受けた。続いて、記念講演として、NHKの今井彰エグゼクティブプロデューサーから「プロジェクトX—ものづくりの挑戦者たち」と題して講演を受けた。記念シンポジウム終了後、隣接した八芳園で40周年記念レセプションを開催した。（ここでは金井信一郎氏の基調講演と今井彰氏の記念講演の要旨を掲載）

基調講演

労働リーダーシップコース 創設に想う

今日はIMF-JCの重要な営み

である労働リーダーシップコース

創立40周年記念の歴史的な会合に

お招きいただき、お話をさせていた

だくことは、わたしにとっては思

いがけない驚きと同時に、また喜

びであり、大変光栄に感じている。

労働リーダーシップコースが創

立40周年を迎えたわけであるが、

大学が労働組合と提携して、労働

組合の中堅役員、特に将来の指導

者になるような人々に対して、大



元・明治学院大学学長

金井信一郎

かない・しんいちろう

学レベルの質の高い労働者教育を
するという内容のものを始めたわ
けであるが、これは実は私の発明
ではない。アメリカの諸大学、さ
らに古くは、イギリスのラスキ
ン・カレッジなどでは、もう何百

年も前からこの種の労働者教育を
開いている。そこで学ぶ人は、労
働者、特に将来幹部となるような
労働者、あるいは労働組合の役職
に就いている人、あるいは社会事
業、福祉施設のリーダーなども対

象になったようである。

日本ではそのような前
例がないということで、
これを実施に移して行
うことは大変困難な業
であった。

私は明治学院大学に
合計40年近く勤務した。
私が経済学部長に就任
した1966年4月に、
経済学部付属の産業経
済研究所が場所も確保
し、実際の活動を始め
た。その研究所の規定
の中に、学校以外の社
会のいろいろなニーズ
に応じて教育をする、
いわゆる、社会教育を
行うこともその機能と

して規定されていた。

そのとき、社会に対して何をも
って貢献しようかと考えたときに、
速やかにわたしの心の中に起こっ
たアイデアは、労働者教育、殊に
将来指導者になるような中堅的な
組合員、あるいは現に組合の役職
に就いている組合員の人たちのた
めに教育をすることができるとは
ないかとの思いであった。

そのときに私の頭の中にわき起
こってきた考え方は、わたしが現
に見聞きした外国の例、特にアメ
リカの労働者教育の事例をヒント
としていた。私は1954年から
55年まで、アメリカ中西部マジソ
ンにあるウイスコンシン州立大学
に留学する機会を与えられ、そこ
で労働者教育が活発に行われてい
る実情をつぶさに見ることができ
たのである。

西ドイツから来た
『話し合い運動』の流
れ

私にそのアイデアを与えてくれ

たもう一つのきっかけは、それよ
りもう数年以上前にさかのぼる。
実は、私は昔からクリスチャンの
端くれである。戦後、日本でクリ
スチャンアカデミー運動が始めら
れたが、これは西ドイツから来た
考え方の影響を受けた運動であっ
た。西ドイツでは第2次大戦で敗
戦を喫して、戦後の人心の荒廃、
動揺、不安が社会に充満していた。
この西ドイツでエバハルト・ミュ
ラー博士というキリスト教の牧師
が、人心の荒廃した社会を、どう
したら本当の意味で復興させ、そ
の活力を復活させることができる
かと考えたときに、これは神から
の啓示によることだと思いが、『話
し合い運動』を始めたわけである。
『話し合い運動』というのはどこ
国でも通常行われているが、単
なる雑談ではなくて、ある課題につ
いて、いろいろな立場の人が一堂
に集まって、1日、あるいは何日
にもわたって、話し合いをすると

東日本コース40周年記念レセプション



いう運動のことである。

西ドイツは敗戦国の中でも最も速やかに復興した日本の先輩国であった。日本の国民も敗戦直後の状態の中で、同じように、人心が荒廃し、家は焼かれ、大変荒れずさんだ社会的な状況にあった。ミユラー博士は日本においてもドイツの『話し合い運動』を広めるために、アルフレッド・シュミットという牧師を日本に派遣し、ドイツのアカデミー運動を紹介して回らせた。私もこの話を聞いたときに、これは日本にとって大事なことだと思つて、親しい友人たちと一緒になつて、日本における『話し合い運動』に参加したわけである。その運動を展開する組織として戦後に日本クリスチャンアカデミー協会が設立された。なぜ「クリスチャン」という名前をつけたのかというと、一番根幹にはキリスト教の考え方があったからである。

日本クリスチャンアカデミー協会の最初のころの長になられた方

は、杉山元治郎という社会党の代議士である。それから、後に首相になった片山哲さんなども、大変この運動に興味と理解を示されていた。

リーダーシップコース開設のきっかけ 私と瀬戸事務局長との 不思議な出会い

1967年7月に第1回労働リーダーシップコースが明治学院大学で行われたが、その前に、不思議な出会いがあった。初代のIMF-JC事務局長の瀬戸一郎さんと私の不思議な出会いである。当時お互いに面識はなかったが、ある共通の人を出迎えるために二人とも羽田空港に行ったのである。その人というのは、アメリカの鉄鋼労連の幹部であり、アメリカ長老教会の重鎮であったミューラーという方である。私は当時、日本キリスト教団に属しており、労働者を対象とする伝道を主に企画する委員会である戦域伝道委員会の委

員の一人だった。そこで、教団本部からわたしに指令が来て、ミューラー氏を羽田空港に迎えに行つたのである。私が羽田空港に迎えに行くと、そこにもう一人の日本人が迎えに来ていた。それが瀬戸さんだったのである。彼の場合は、IMF-JC事務局長であるから、国際労働運動の関係で、迎えに来ていた。瀬戸さんとわたしはそのとき、羽田空港で初めて出会ったのであるが、話してみると、私が明治学院大学の教授で、経済学部長であったので、彼が明治学院大



第1回労働リーダーシップコース (67年、明学)

学のOBだと知って、大変な親しみを感じ、お互いに意気投合した。実は、後の労働リーダーシップコースの開設にとって、私と瀬戸さんとの出会いが非常に大事なターニングポイントとなった。

大磯アカデミーハウスでの話し合いの会

なんとなれば、わたしは、ちょうどそのとき、日本における『話し合い運動』の関東地区活動委員の一人であった。一方、関西地区の活動委員の一人であり、キーパーソンだった方が、昨年8月に亡くなられた竹中正夫先生であった。それで、関東地区の委員の私が、ある年の、夏の『話し合いの会』を企画する役をおおせつかり、労働組合のリーダーのための話し合いにしようと考えて、「労働組合のリーダーをなるべくたくさん集めてください」と瀬戸さんに頼んだ。JCの初代事務局長になっていた瀬戸さんはすぐに対応してくれて、数十名の労働組のリーダーの方が

集まってくれた。

そのときの話し合いの会の講師は、堀井さんという総評議長だった。それからもう一人の講師が初代のIMF-JC議長であった福岡知之さんであった。この二人が講師で、わたしが司会役をして、本における初めての労働問題の話し合いの会が始まったわけである。

話し合いの会で労働者教育の必要性を提案

その話し合いの会の終わりに近づいたころ、司会役であった私は一つの問題提起をした。当時の日本の状況は、戦後初めて労働組合が合法化され、労働組合が、自然的に非常にたくさん結成されていった。そのようなときなので、労働組合もいろいろな人あるいはイデオロギーによって指導されていた。中にはマルクス主義とか、共産主義とかにリードされている組合も多数あった。

その話し合いの会の場には、労働組合のリーダー約数十名が集まっていたが、中には労働省とか、内務省などの官僚の人たちも何人か来ていた。そこで現在の日本の経済と、これからの体制ということについてのざっくりばらんな話し合いも行われた。

会の終わりの方で、司会役のわたしが参加者の皆さんに、「日本で労働組合が非常な勢いで発展し、増えてきているけれども、労働組合運動の先輩国がたくさんある中ではあるけれども、日本にはないものは何だろうか」と聞いたときに、すぐに、参加者の一人が、「それは労働者教育だ。特に大学が行う労働者教育だ」ということを発言した。私自身がそう思っていたことであり、わたしがその方に水を向けたような感じもある。それで、私は、「もし日本でもこのような大学による労働者教育というものを組合が本当に要望するのであ

れば、まだ分からないけれども、明治学院大学は受けて立つ用意がある」と、これもまた当時の事情を思えば大胆な話であるが、そのように水を向けて、その会合は終わった。

受けて立ったJC、そこから労働リーダーシップコースが始まった

そうしたら、何か月かたった後で、IMF-JC本部から瀬戸事務局長が、福岡議長と一緒に明治学院大学の私のところへ来られて、「ぜひ明治学院大学で労働者組合幹部の教育をしてほしい」という要望を出された。私は、即座に「それはわたしの願うところだ」とお応えした。しかし、実際にそれを進めるためには大学首脳陣の理解と機関会議の承認を得なければならぬので、お二人を、当時の明治学院大学の学長、若林先生にも会っていただき、このことをお願

いしたところ、若林学長もなかなか考え方の広い方であり、よからうと賛同された。「経済学部附属の産業経済研究所の仕事にはそのような社会教育ができるとの規定があるから、産業経済研究所がやるのがいいだろう」と賛成された。それからさらに、学院長の武藤富男先生にもお二人に会っていた。き、この方もなかなか慧眼が深く、外国のことにも造詣が深い方であり、計画に賛同していただいた。この明治学院大学の両首脳が、その計画は大変いい。賀川豊彦を生んだ明治学院が行うにはふさわしいことだと賛同されると共に、大変な激励を与えてくださった。そこでこの労働リーダーシップコースの開設計画がとんとん拍子に進んで実現した次第である。

歴史の証言者の一人として、労働リーダーシップコース開設40周年にあたり、開設の頃の思い出の一端を述べさせていただきます。

(文書編集 金属労協組織総務局)